

奨励賞の「狩人の想い」は、十七歳の青年、柳瀬真が主人公。彼は「自動販売機に住む魔物を封印する仕事」をしています。冒頭から明かされるその設定がおもしろく、一気に物語に引き込まれました。

自販機にはどんな魔物がいるのか？ その魔物をどのように封印するのか？ 封印する意味と目的はなに？ そういった読み手の疑問を、作者は徐々に解き明かしていきます。

自販機に潜む霧のような魔物の名は「思鬼」。「シキ」はどのように生まれ、人々にどんな害を及ぼすのか。真が高校を中退してこの仕事「思鬼狩」についたのは、どういう事情からなのか。真からその父の話へと進めていくストーリー展開もうまいと思いました。

ただ、設定がおもしろいだけに、その設定に引きずられすぎて、登場人物たちがいまひとつ描き切れていないという面もあるように思います。ひとりひとりの人物像を深めていくことで、より奥行きが感じられる物語になることでしょう。

昨年最終選考に残った同じ作者の「アップercut」は、登場人物たちの活きの良い会話が耳に残る現実的な作品だったと記憶していますが、「狩人の想い」は、それとはがらりと異なる世界観を持つ物語。作者は発想が豊かでいろいろなタイプの作品が書ける人なのだなど、末頼もしく思いました。

佳作の「記憶の手帳」は中学生の康太の視点で近所に住む祖父のことが描かれています。

夏休み、学校の宿題や塾の課題に追われている「僕」の家に毎日やってくる「じいちゃん」は、もういろいろなことを忘れていて、「僕」にとっては「少し手のかかる」「時には面倒」な「かわいい弟」のような存在です。「じいちゃん専用の魚の名前が漢字でびっしり書き込まれた湯呑」で、祖父は「幸せそうにゆっくりと」お茶を飲み、「ここで寝る！」とわがままを言うので、「僕」は布団を敷いてあげるのです。

やがて訪れた祖父の死。康太は祖母から、祖父がいつもズボンのポケットに入れていたという手帳を渡されます。そこには、「忘れたくないことを書き留めた」祖父の几帳面な字が並んでいて、「康太が布団をしいてくれた」というところが、丸で何度も困ってあったのでした。

この「手帳」もですが、「湯呑」の使い方も上手です。祖父の死後、祖父の湯呑がキッチンカウンターに伏せて置かれたままであるところの描写は、こんなふう。

「湯呑に書かれている魚たちが、ずっと逆さ向きにされていて(中略)うっすらと埃がかかっている」。映像が、浮かんできますね。湯呑という小道具を活用し、祖父の死と遺された家族の喪失感が、巧みに表現されています。

全体を通して誤字が目立ったのと文が粗いのが残念でしたが、ユーモラスであたたかで、たいへん好感の持てる作品でした。